視点

～これからの社会教育の役割～

石川県社会教育協会
会長　新村　健了

会長の職を拝命してから十か月が経過しようとしています。奥名洋明前会長におかれては、十二年間の長きにわたり、当協会の発展にご尽力をいただき、その功績は極めて大きいものと感じております。ここに改めて感謝と心から御礼を申し上げます。

また、昭和二十三年の発足以来、数多くの先輩諸氏のご尽力により、本県の社会教育の振興に寄与してきた当協会であります。微力ではございますが、会員の皆様のご指導、ご協力を得て、職責を果たしてまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

さて、我が国においては、少子高齢化の急激な進行、グローバル化の進展に伴う国際競争の激化や地球環境・食糧・エネルギー問題、さらに都市化や家族形態の変容、価値観やライフスタイルの多様化などによる地域社会等のつながりの低下など、社会は大きく変化してきている。

このような変化は、相互に関連しており、問題の解決は一朝一夕には不可能であるが、解決の糸口となるのは、人の知恵、文化、コミュニケーションなど、いわゆる「ソフトパワー」にほかならないと考えられる。すなわち、社会がどのように変化しようとも、自ら考え行動し他者と協働しつつ新たな価値を生み出す、真の「生きる力」の育成が社会を構成する一人一人に、また社会全体に求められていると思う。そこで、こうした社会の変化を踏まえて、これからの社会教育が果たすべき役割について考えてみたい。

一つ目は、個人の学びを豊かにすることである。これは、これまでも社会教育が力を入れて取り組んできていることであり、また平成二十年の中央教育審議会答申においても、「『知の循環型社会』の構築を目指し、国民一人一人の生涯を通じた学習の支援」として提言もされている。各個人が興味や関心に応じた活動を充実させることにより心豊かな生活を送るとともに、社会の変化に応じ、必要な知識・情報・技術等を習得・更新することにより豊かな生活を送ることを可能とするものである。そのためには、幅広い関係者・機関の連携を一層進め、「子育て世代」や「高齢期」などのライフステージに応じた学習機会の充実や学習環境の整備が求められる。

二つ目は、学びを通した地域づくりである。

未曽有の大災害となった東日本大震災は、人と人との「絆」や人と地域との「絆」が本当に大事なものであるということを、改めて認識させられた出来事でもあった。社会の一員として、自らのニーズに基づいて学習した成果を社会に還元し、地域の中で互いに学び合い、交流することを通して地域住民の間の「絆」や連帯感といったものを再構築していく必要があると考えている。

こうした二つの方向性は、昨年の三月に策定された「石川の教育振興基本計画」においても示されている。その基本目標の一つに「学びの気運に満ちた生涯学習社会づくりをめざす」ことを掲げており、県民一人一人が自分らしい学びを通して新しい自分を見つけるとともに、様々な出会いや交流をすることで、自らの成長と自己実現を図り、その成果を生かすことのできる社会づくりを目指している。そして、こうした生涯学習社会を実現するために、社会教育は中核的な役割を担わなければならないと考えている。

このようにこれからの社会教育は、個人の学びをより充実させるとともに、学びが個人だけで終わるのではなく、共同の学びへと広げ、その成果をボランティア活動や地域活動に生かすことで、地域課題の解決が図られ、ひいては地域住民の絆づくりへとつなげることが重要である。当協会の皆様がそれぞれの地域においてこうした活動にこれまで以上にかかわっていただきたいと期待している。